

# ポスト鄧時代の中国

# 命脈尽きる？ 社会主義革命国家

中嶋 嶺雄（カリフォルニア大学大学院（サンディエゴ校）客員教授）

なかじま・みねお 一九三六年生まれ。東京外国語大学中国科卒。東京大学大学院修了。東京外国語大学教授・海外事情研究所長。九二年に現職兼務。社会学博士。主な著書に「北京烈烈」「現代中国論」「香港——移りゆく都市国家」「国際関係論」ほか。

## 矛盾した路線は貫徹できるか

中華人民共和国の命脈は、いつまで続くのだろうか。今日のように歴史的な脱社会主義の潮流が加速化しつつある中で、社会主義革命国家としての中国が、二一世紀まで現在の体制を維持することが果たして可能だろうか。社会主義国としての中華人民共和国が、豊かな社会的・経済的な果実を残してきたのなら、ともかく、決してそうではなかっただけに、中国の国家的将来についての保証はあり得ない。

中国では、革命四〇周年の一九八九年に六・

四天安門事件が起こり、既に深刻な体制的危機を体験している。革命五〇周年、つまり建国後半世紀は一九九九年であるが、中華人民共和国の命脈は、ひよっとするとそれまでに尽きてしまうかもしれない。あるいはタテマエとして国名だけそのまま残っているとしても、社会主義革命国家としての中国では既になくなっていく可能性も大きいように思われる。最近の中国のさまざまな動きは、このような展望を促している。

天安門事件以後も、いわゆる改革・開放の路線をめぐる深刻な党内闘争の絶えなかった中国では、昨秋、共産党第一四回大会が開かれた。今日の中国を依然としてリードして



党は江沢民(中央)李鵬(右)体制を転換できなかった

AFP



いる革命第一世代の多くの指導者にとつては、恐らく最後の機会だったと思われる今次党大会は、「社会主義市場経済」というテーマを提起して注目されたが、当面の中国の政治的・社会的現実を反映して、極めて矛盾の大きいものでもあり、ポスト鄧小平時代の中国を展望するうえで、さまざまな手掛かりを与えてくれる。

今回の党大会は、中国がいよいよ本格的なポスト鄧小平時代への移行期にさしかかっていることを示し、鄧小平色をかなり強めはしたが、党は江沢民、國務院は李鵬という当面の指導体制を転換することはできなかった。

つまり「六・四」によって生まれた天安門体制は基本的に変わってはいないのであり、その枠内での改革・開放の推進でしかないのである。したがって、中国社会の民主化と古い政治体質の打破を求めた天安門事件は、今回も「反革命動乱」だとされたまま、趙紫陽の復活も許されなかった。こうした限界状況の中で、経済は自由化、政治は統制という矛盾した路線が今後も貫徹されるかどうかは、ひとえに改革・開放が成功するかどうかにかかっており、まだ結論は出ていない。

そうした状況の中で、ポスト鄧小平時代に向けての最大の懸念は、中国政治にまたしても鄧小平礼賛という個人崇拜傾向が極めて濃

厚になっていくことである。今次大会では「鄧小平理論」とか「鄧小平同志は偉大な総設計師」といった言葉が目立ち、深圳などの経済特区には毛沢東時代のときのような、あるいはそれ以上に巨大な鄧小平の肖像の看板が最近出現している。このような現象は、ある意味では、ポスト鄧小平時代にすべてを預け、現在は鄧小平が君臨しているからすべての責任を鄧小平に負わせよう、といった形になっていることのように思われる。

### 沿岸から白くなる「赤い大陸」

いづれにせよ、今回の党大会の主役としてヒーローは、まぎれもなく影の最高実力者・鄧小平その人であった。それだけに鄧小平の将来については不安があるのだが、ここではさしあたり、中国では建国後、それぞれの党大会の主役ないしはヒーローが、ことごとく

失墜しているという厳然たる事実を振り返っておくことが必要であろう。すなわち第一三回大会（一九八七年）の趙紫陽、第二二回大会（一九八二年）の胡耀邦、第一一回大会（一九七七年）の華国鋒、第一〇回大会（一九七三年）の王洪文、第九回大会（一九六九年）の林彪、第八回大会（一九五六年）の劉少奇である。

「南風」が中国をすっぽりと覆うだろう（台湾の民主化運動）

AFP



今日の中国では、いわゆる改革派も保守派も共に、社会主義の内部的な変質としての「和平演変」を必死になって防止しようとしている。「蘇東波」と呼ばれるソ連・東欧化の波は、当面の改革・開放によって、鄧小平や陳雲らの革命第一世代の長老が影響力を持っている限り、旧ソ連や東欧の混乱が反面教師にもなつて、取りあえずは食い止められるかもしれない。

しかし、「和平演変」を誘うもう一つの要因として「南風」（香港、台湾からの影響）は、「社会主義市場経済」が展開されればされるほど、中国をすっぽりと覆い尽くすのではなからうか。こうして「赤い大陸」は、沿岸地帯から刻一刻と白くなっていくであろう。社会主義革命国家としての中華人民共和国の命脈は、まさに尽きようとしていると言わざるを得ない。